

---

# メル友

空猫月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

メル友

### 【Nコード】

N3447Z

### 【作者名】

空猫月

### 【あらすじ】

初恋つて、なんでしよう。

無駄にドキドキしなくても、一緒にいたいと思うだけで、それはもう恋なんじゃないかな。

そんな思いを込めて、作者から。

「誰でしょう??」

そんなメールが来たのは、文化祭を間近に控えたある日のこと。

「誰? わかんないよ」

下手に違う人を言っちゃっても、向こうが困るしな。そんなことを考えて、メールを打つ。うすうす予感があったものの、とりあえずわからないフリをしておいた。

「悠斗だよ!」

三分もたたないうちに、返信が来た。

「森元君か。びっくりした」

本当は、それほどびっくりしていないけど。きっと、昨日人伝まねで連絡を取っていたから、間に挟まれていた人が森元君にメアドを教おえてしまったんだらう。勝手にしてもらっちゃ困るけど、クラスメートだったらいつか。

その日から、森元君とは毎晩メールをした。特に付き合っているとかじゃない。私のほうはそうでもないけど、森元君はパソコン好きでいろんな人とメールやチャットをしている。だから、私もメル友の一人なのだらう。

「すごい。一週間も経ってないのに、メール100件突破」

「祝 100!! 本当にすごいね」

そうか、こんなにメールでやりとりしていたんだ。学校では、目を合わせることもさえも稀なのに。

メールの内容は、学校で話せばいいような世間話。メールでなくてもいいじゃん、と思うこともあるけれど、それでもなんとなく森元君とつながっていると思うと安心できた。だから、来たメールには必ず返すようにしている。

「ね。水田が、修学旅行で咲野に告るってさ」

こんなメールが来たのは、修学旅行を一週間後に控えた日。

水田君と言えば、クラスメートで以前も告白されたことがある。

ただし、最初私は気付かなくて、あとで友人に教えられてやっと気づいたんだけど。

「本当に？」

それだけ返信すれば、

「本当。なんて返事するの？」

と、返ってきた。

「んと、」

そこまでメールを打って、はたと止まる。

どうすればいいんだろう。私には、好きな人ではなく恋愛対象だな、と思う人しかいない。水田君はどうしても振ることにになってしまうけれど、それで「じゃあ、好きな人は？」って聞かれたら、なんて答えたらいいのかな。

考えて、考えたあげく

「断ることにする」

とだけ送った。

「断るのか。咲野には好きな人とかいるの？」

ほら、来た。森元君は、意外と恋バナが好きだ。ずっと「いない」と答えてきたけれど、今はなんだかその言葉がしっくりこない。

どう答えたらいいのか分からなくなつて、

「森元君は？そっちが教えてくれたら教えるよ」

と送った。どう返事が返ってくるかはわからないけれど、時間稼ぎはできるかな。

次の返信が来るのに、えらく時間がかかった。森元君は、パソコンを離れてしまったのだろうか。それとも、もう寝てしまったかな。だとしたら、私も寝てしまおう。

歯を磨いて、トイレをすませる。布団に潜り込む前に携帯を確認しても、やっぱり返信はなかった。

布団でうつらうつらしていると、

「You got a mail」

というおじさんの声が聞こえた。あ、返信がきた。携帯を開くと、思った通り森元君からの返信。

「俺は、咲野が気になってる。あ、でも、いつか面と向かって言うから」

・・・これは、告白ととってもいいのだろうか！？どうも、森元君の考えていることはよくわからない。私に、どうしろというのだろうか。

そりゃ、私だって森元君のことが気になっている。毎晩メールをして、森元君のいいところがいっぱい見えてきたから。どうしてか、お父さんみたいなお兄さんみたいな不思議な安心感を与えてくれる人だから。

どうしようもなくなって考えたあげく、森元君には

「ありがとう。もう寝るね、おやすみなさい」

と送り、別の人に

「help!!今、メール出来る？」

と送った。

こんなときは、親友の恋華に教えてもらうに限る。恋華は恋愛経験が豊富で、恋愛に見向きもしなかった私よりかはいいことを思いづくに違いない。

唐突に、携帯が光った。着信音がなっってしまったうちに、メールを開く。

「学校で」

恋華は意外と、薄情者だった。この調子じゃ、私は今夜一睡もできないかもしれないのに。

そんなことを思いながら、いつもの如く私は穏やかな眠りについた。

翌日。

「ふーん、いいんじゃない？」

最近あったことのすべてを話すと、恋華はこともなげに言った。

「森元、けっこうモテるよ？ 気があるっばいんだったら、付き合っちゃえば？」

「でも……」

そこまで踏み切れないんだよ！ 心の中で叫んだそんな思いを、親友は察してくれたのか。

「森元のこと、どう思ってる？」

今度は、別の部分から切り込んできた。

「んーとね、」

特に、良い人というイメージしかなかった。けれど、最近は……

「一緒にいたいな」って、漠然とだけ思う」

そう。特に理由はないけど、一緒にいたいと思ってしまう。メールをしていると、特に。

「なんだ」

でも、それが好きって気持ちなのかな？ 悶々と考えていると、恋華が気の抜けた声をあげた。

「なんだ、好きなんじゃない。さ、これで断る理由はなくなったでしょ」

「え」

これが、好きという気持ちなのか。初恋をいまだに経験していない私には、理解しがたい。

「勝負は修学旅行ね！ 応援するから、任せて」

頼もしい笑顔を見せる親友に、不本意ながら惚れそうになった。

さてさて。時は過ぎ、毎晩メールをする仲を保ちながらも修学旅行二日目。

自主行動が終わって、疲れているけれども楽しそうな顔をした森

元君が、部屋に入ってきた。私とは同じ班ではないけれど、部屋が一緒の恋華と同じ班だから、ちよくちよく打ち合わせを口実にして顔を出すのだ。

「あ、森元！」

風呂に行く、といった森元君を恋華が呼びとめる。

「風呂あがったら、部屋に来て。すぐに」

「オーケー」

恋華はなにをするつもりなのだろうか。よくわからないけれど、森元君が部屋を出て行ったあとに

「真由、部屋にいなさいね」

と言ってきたから、告白大作戦を決行するつもりなのだろう。詳しいことは当事者であるのに全く知らない。でも、

「ありがとう、わかった」

親友の好意だ。ありがたく受け取ろう。

森元君を待つこと、十分。部屋が同じ子たちは、そろって別の部屋に遊びに行ってしまった。なので、10畳の部屋に私ただ一人。ちよつとさびしいような、なんだかドキドキしてしまうような。

「ちよつす」

森元君が、部屋に入ってきた。

「誰もいないの？」

キョトンとした森元君の問いかけ。声が出なくて、首を縦に振る。

「これってさ、」

いちいち、森元君の声に反応してしまう自分が煩わしい。

「告れって、暗に言ってるよね」

「さ、さあ？」

まずい、どもってしまった。適当にはぐらかしたけど、うまくいったかどうか……。でも、それはそこまで問題ではない気がする。本当の問題は、早々にばれてしまっていることだ！恋華のバカ、心の準備ができないじゃないか。

「・・・腹くくって、言うか」

しばらくの沈黙が流れた後。パンツと胡坐をかいていた膝を叩き、森元君が私に向き直る。

「真由さん、好きです」

たったそれだけの言葉なのに、胸がじんとした。

「わたしも、好き、です」

途切れ途切れになったけれど、やっとの思いでそれを伝える。

気持ちを伝えた瞬間、ふわっと笑った森元君の顔がなんだかとてもカッコ良かった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3447z/>

---

メル友

2011年12月11日21時54分発行